

近現代史ゼミは2000年1月14日に第1回を行いました。それから16年が経過し、17年目には入ったということになります。第1回から第34回(2003・3)までは毎月1回のペースで行いました。その後、2003年5月24日のゼミから2か月に一度のペースになり、このペースのまま今に至ります。これまでに上げたゼミ内容の質と量は大変なものだと思います。

さて、今回のテーマは上記の通り、芥川と山宣ですが、要は昭和の初期がどういう時代であったかということになります。

1、芥川龍之介の自殺・「ぼんやりとした不安」の背景

①恩師・夏目漱石の死(1916)

芥川にとって、漱石は最も大きな精神的支柱でした。その漱石は当時の日本の近代化について大変な不信感を持っていました。その不信感を当然、芥川も受け継いでいたでしょう。漱石の死は芥川に大きな衝撃を与えたようです。

②大正から昭和へ相次ぐ恐慌、労働争議、小作争議

激しい階級対立の中で、芥川は自分の居場所はどこなのか、悩んでいました。自分はブルジョアではない、しかし、資本家と真正面から闘う労働者や小作人でもない。

③プロレタリア文学からの批判

1920年代からプロレタリア文学の潮流が始まります。東大の後輩で10歳年下の中野重治などもそこに参加していました。中野が招かれて芥川の自宅を訪ねた時のことが『むらぎも』に描かれています。芥川は憔悴してみじめな様子で、間もなく自殺してしまう時期だったようです。女性問題を自殺の原因とする説もありますが、やはり、時代のうねり

の中で、作家としての行き詰まりが原因だったのではないのでしょうか。

2、昭和初期の時代

①普通選挙法成立(1925)を受け、次々に無産政党が生まれました。

しかし、治安警察法などで禁止されたり、内部の対立で離合集散を繰り返しました。

②第1回普通選挙(1928)

衆議院定数466の中で、無産政党の当選者は8名。激しい選挙妨害の中でも当選した8名の中に労働党の山本宣治もいました。

③中国大陸への野望

第一次山東出兵(1927)、張作霖爆殺事件(1928)など、後の満州国成立(1932)に向けた準備が着々と行われていました。

④相次ぐ弾圧

京都学連事件(1926)、三・一五事件(1928)など、治安維持法を使って、活動家や共産党員を大量に検挙するようになります。特高警察が設置され、激しい拷問も行われました。

3、山本宣治(1889~1929)

京都出身、生物学者で大学の教員だった山本宣治は、無産者解放運動に関わり、労働者農民党(労働党)に参加、1928年の第1回普選で当選しました。

しかし、治安維持法の改悪(最高刑を死刑に)が緊急勅令で行われ、その事後承認の議会で反対演説をするべく、神田の旅館にいたところを右翼団体の黒田保久二に刺殺されました(1929年3月5日)。宇治の山本家の墓碑銘には「山宣ひとり孤壘を守る だが、私は淋しくない 背後に大衆が支持してゐるから」という最後の演説の一節が刻まれています。(実際の演説は「孤壘」ではなく「赤旗」であったようです。)

《文責・設楽春樹》